

## 赤穂事件と天下の法（1）

赤穂事件とは、元禄15年12月14日（旧暦）、大石内蔵助を中心とする浅野家遺臣47人が吉良邸を襲撃、上野介を討ち取ったというものです。

そもそも事の発端は、遡ること1年9ヵ月前、元禄14年3月14日（旧暦）、浅野内匠頭が江戸城内松の廊下にて高家筆頭吉良上野介に斬りつけたという刃傷事件です。この事件に対して、幕府は、加害者である浅野内匠頭には即日切腹を命じ、一方、被害者となった吉良にはおとがめなしとします。

大石内蔵助等による吉良邸討ち入りは、大石等の亡き主君への忠義心、更には、幕府の片手落ちの裁決に対する異議申し立てとして行われたといった説が語られていますが、実際のところは良く分かっていません。

まして、松の廊下での刃傷事件が何故起こったかについても、その原因は分かっていません。確かなことは、浅野内匠頭の方には吉良を殺したいと思うほどの「遺恨」があったということだけであり、それ以外のことは、ほとんど後世の創作と思われる。にもかかわらず、我々は、寛延元年（1748年）に作られた人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』及びその後数々作られてきた「忠臣蔵」ものの影響を大きく受けており、浅野内匠頭の刃傷事件は、吉良の浅野への苛めが原因であると解釈している方が多いのではないのでしょうか。

しかし、一体、5万石の浅野家を潰し、約300人の家臣とその家族を路頭に迷わせてでも晴らさなければならない「遺恨」というものは、本当にあったのでしょうか。

吉良上野介は、地元では名君であったと伝えられていますが、一方の浅野内匠頭は、生来短気であり、無骨で真面目ではあるが劣りの心がないとも評されていたといえます。

「忠臣蔵」は、創作された物語であるはずなのに、それが繰り返し流されることによって、吉良は悪人で、浅野は被害者、大石は忠義の臣という構図がまるで史実であるかのように感じてしまっている、これは恐ろしいことです。

池宮彰一郎さんの作品に「その日の吉良上野介」という小説があります。短編小説ではありますが、それまでの「忠臣蔵」とは異なり、吉良上野介の視点

から松の廊下の刃傷事件を解釈しようというもので、吉良上野介と浅野内匠頭の心のすれ違いに光を当てた斬新な作品です。

浅野内匠頭は18年前にも勅使御馳走役を務めており、吉良上野介も安心して任せていたのですが、18年の間には慣例も色々と変更されており、不手際が生じてしまいます。それは必ずしも浅野のせいばかりではありませんが、吉良は、老いのせいか気短になっており、つい言葉荒くせきたててしまう。これが、浅野には苛めと写ったのではないか。針のむしろに座る心境の浅野は、遂に吉良に賄賂を贈ろうとします。しかし、吉良は、「そこもと、何か思い違いをしておられる。そのような品頂く謂われはない・・・」と受け取りません。吉良にしてみれば、それを受け取れば、連日の慣例違いの是正はすべて苛めとなり、賄賂の強要とされてもいい訳が立たないと考えたからです。そして、吉良は自分の心境をこう語ります「わしは悪くない。天地神明に誓って悪意はなかった。浅野も、悪意はなかったと思う。すべては行き違いから始まった。18年の時の長さ、わずか4日しか余裕のなかった時の短さ、それがすべてなのだ、その、時の長短が確執を生み、増幅され、遂には刃傷という破局に至ったのだ。」

この短編に目を通しながら、吉良上野介と浅野内匠頭との間の行き違いといったものは、どこにでもあることであり、その行き違いから、人を傷つけ、殺してしまうという事件もまた、後を絶ちません。人と人の中には、思わぬところで誤解や軋轢が生ずるものだし、そういう煩わしさは、時代が移っても何も変わってはおりません。

小説では、吉良は「自分も浅野も共に悪くない。すべては行き違いがあそこまでの事件を引き起こしたのだ」と述懐しますが、行き違いの原因は、吉良、浅野双方に言葉が不足していたからではないでしょうか。

身分の上下がはっきりしていて、目上の者にものがいえなかった時代ならいざ知らず、今は、自分の考えを伝えていく努力を怠るべきではありません。それを煩わしいと逃げてはなりません。何故なら、我々は、社会の中で生きていく以上、その煩わしさから逃れることができないからです。

(塾頭 吉田 洋一)